

## 柏倉松蔵の医療体操に対する考え方に関する研究

中 川 一 彦

### A study on Matsuzō Kashiwakura's conception toward the medical gymnastic

Kazuhiko Nakagawa

Matsuzō Kashiwakura was graduated from Taisō-gakko in 1903 that was attached to Nippon Taiiku-kai. He was widely known as the founder of Kashiwa-gakuen in 1921 and also one of the pioneers of the development of education for the crippled in Japan.

In this study, the author investigated his conception toward the medical gymnastic through his papers and a document of his lecture.

In consequently, the following summarised inferences were deduced.

1. The medical gymnastic that Matsuzō Kashiwakura learned and practiced was not the traditional "Dōin" but the modern medical gymnastic that was based on Swedish gymnastic by P.H.Ling.
2. Matsuzō Kashiwakura was anxious for the necessity of using the individualized education program principle for meeting the needs of each child and put into practice together with medical gymnastics and educational gymnastics.

#### 1. はじめに

筑波大学体育科学系紀要第6巻(1983年)で報告したように、柏倉松蔵(1882—1964)は、20代の最初の一年を日本體育會體操学校に学び、当時、同校で、生理衛生を教授していた、ボストン大学医科大学に学んだ敬虔なクリスチャンでもある医師・川瀬元九郎等に、啓蒙主義的教育理念と汎愛主義教育の流れをくむリング(P.H.Ling)のスウェーデン体操を主流とした体操の身体的目標である教育体操と医療体操を中心に学んだのであった。<sup>13)</sup>

そして、明治の終りから大正にかけて、「私がか心にかかってならなかったのは、どこの学校へ行っても、体操の時間になると、足や手の不自由な子供がずっと1人や2人はいて、運動場の隅にしょんぼりしていることでした。元気に体操する子供たちと対照して余りにも傷々しく、胸に刻みつけられて忘れられなかったのです。あの身体の不自由な子供たちは、どんな風に生成して社会に出て

行くのだろう。そんなことを考えると、私は、あの不幸な子供たちをあのまま放っておけない。何とかしてやらなければならないことが、常に胸の中にあったのです。』<sup>4,p8)</sup>と懐述しているように、当時の学校体操に疑問をいだき、医療体操と教育体操の併用の必要性を希求するようになっていったのであった。

このようにして課題をみいだした柏倉松蔵は、医療体操を詳しく知り得ないうちに、これと似たものとして、マッサージの修得を志し、1918年、按摩術甲種試験に合格すると、直ちに、医療体操研究のために、東京帝国大学医学部整形外科教室へ入局、田代義徳に師事したのであった。

本研究では、このようにして学んだ柏倉松蔵の医療体操はどのようなものであり、また、彼の医療体操に対する考え方はどのようなものであったかを、わが国の医療体操を振り返りながら、彼の著述『醫療體操ニ就イテ』(1921年)と『肢体不自由の治療と家庭及学校』(1956年)、並びに講演記

録『醫療體操に就て』(1921年)を元に、知ろうとしたものである。

## 2. わが国の医療体操小史

わが国の医療体操を20世紀初頭まで、『皇漢醫學及導引の史的考察』<sup>1)</sup>を参考に概観するならば、その古くは、大宝律令の定められた頃(730年)、針生が学んでいた『素問』の中にある導引にさかの

ぼることができる。

この導引は、『素問』すなわち『黄帝内経』(紀元前2698年)にある導摩坐功の治病への利用が、紀元前525年、老子導引42勢、太上混之按摩法として後世に伝わり、華陀五禽之戲(285年)、『千金方』(682年)の老子按摩法、天竺按摩法、調氣之法、『千金翼方』(682年)の彭祖之導引等として中国に伝わってきたものであった。(表1)

表1 『皇漢醫學及導引の史的考察』に見る導引按摩の発展

年 代	日 本	中 国
BC 2698		『黄帝内経』著わされる
525		老子導引42勢, 太上混之按摩法できる
AD 285		華陀五禽之戲できる
610		巢元方: 乾浴を紹介す(『諸病源候論』)
682		老子按摩法, 天竺按摩法, 調氣之法できる(『千金方』)
		彭祖之導引できる(『千金翼方』)
827	養生書『攝養要訳』著わされる	
868	『千金方』を模し『金蘭方』著わされる	
984	乾浴, 彭祖の和神導氣の法, 婆羅門導引18勢紹介される(『醫心方』)	
1184	釋蓮基: 調氣導引法の存在を紹介す(『長生療養方』)	
1284	惟宗具俊: 導摩を紹介す(『本草色葉抄』)	
1293	惟宗時俊: 涪翁の摩踵を紹介す(『醫家千字文』)	
1303	僧性全: 乾浴を紹介す(『頓醫抄』)	
1362	僧有隣: 治病と養生の区別を示す(『福田方』)	
1456	竹田昭慶: 乾浴と推奨す(『延壽類要』)	
1547	吉田宗桂: 『聖濟總録』を持ち帰り, 神仙導引, 太上混之按摩法, 天竺按摩法, 婆羅門導引12法を紹介す	
1586	曲直瀬玄朔: 『養生物語』を著わす	
1598	加藤清正: 『醫方類聚』を持ち帰り, 天竺按摩法, 老子按摩法を紹介す	
1599	曲直瀬玄朔: 静坐胎息等導引按摩を示す(『延壽撮要』)	
1648	山脇道作: 伝承されてきた養生法を集録す(『養壽録』)	
1648	林正且: 導引に関する専門書『導引體安』を著わす	
1661	中国の書『醫林類證集要』(1482年)が復刻され, 鍼灸導引が推奨される	
1678	草刈三越: 導摩坐功の療病及び予防医学としての効能を示す(『醫教正意』)	
1678	中島仙菴: 導摩を推奨す(『歌養生』)	
1686	深見玄岱: 摩擦を推奨す(『養生編』)	
1692	竹中通庵: 導引に関する遺訓を収録す(『古今養性録』)	
1695	八段錦導引法和解紹介される(『通仙延壽心法』)	
1705	貝原益軒: 養氣を説く(『萬寶鄙事記』)	
1707	大久保道古: 『古今導引集』を著わし, 西洋の求心的な導引を紹介す	
1713	宮脇仲策: 『導引口訳抄』を著わす	
1713	喜多村利且: 八段錦導引法を図解し紹介す(『導引體安』及び『同附録二卷』)	
1713	貝原益軒: 調氣の法や導引についてわかりやすく説く(『養生訓』)	
1713	奈良宗哲: 摩擦及び四肢の屈伸運動の効能を説く(『妙薬不求人』)	
1714	松尾道益: 八段錦導引法を図解説明す(『養生俗解集』)	
1715	芝田祐祥: 導引法を紹介し, 養生の本旨を説く(『人養問答』)	

827年、わが国最初の養生書『攝養要訣』が著され、868年には、『千金方』を模して『金蘭方』ができ、984年の『醫心方』で、乾浴(単元方が、610年、『諸病源候論』において紹介した導引法)及び彭祖の和神導気の法、姿羅門導引18勢(天竺按摩法)等が紹介されたのである。

このようにして伝承されてきた導引は、14世紀になると、治病と養生が区別されるようになり、延寿の方法として養生が求められ、按摩導引法が推奨されるようになっていったのであった。

1586年、曲直瀬玄朔の著した『養生物語』には、いわゆる運動の勧めもみられるようになり、1648年には、林正且による、わが国では初めての導引に関する専門書『導引體安』も書かれるようになるのである。

17世紀になると、竹中通庵によって、彭祖の導引、太上混之按摩法、天竺按摩法、姿羅門導引、李南豊の導引、華陀五禽術、巢氏導引、赤松子導引、坐功21術等、導引に関する先哲の遺訓を収録した『古今養生録』(1692年)や、八段錦導引法を和訳した『通仙延壽』(1695年)の刊行等をもみるようになるのであった。

そして、18世紀になると、日本の伝統的な遠心的な按摩に対し、西洋の求心的な導引と呼称されていた、今で言う、マッサージの技術も世に行われるようになり、わが国に伝わって来た導引法は図解され、また、按摩法もやさしく解説されるようになるのである。

加えて、通俗を旨とし、田夫野人、児童走卒にもわかるよう、すべて仮名まじり文をもって懇切丁寧に書かれた貝原益軒の『養生訓』(1713年)も著わされ、調息の法や導引法、そして按摩法等について平易に示されるようになったのであった。

また、同年(1713年)出された、奈良宗哲の『妙薬不求人』には、自縊者救治の條で、胸部の摩擦及び四肢の屈伸法を紹介したのであった。

このような按摩導引の普及、つまり大衆化の中で、18世紀には、その術が、盲人婦女子の手に移り、勢い、賤伎視されるようにもなり、手法も歪曲され、「按摩とり貴人の頭上はりまはす」(宝井其角、『続五元集』<sup>1)P160</sup>)などと嘲笑されるようになってしまったのである。

そして、19世紀の後半、つまり明治維新を境に、この風潮を戒めるようになってきたのであった。

すなわち、1885年、免許及び取締規則が公布され、相前後して、西洋のマッサージが輸入され、陸軍々医等によって研究紹介されるようになったのである。

また、20世紀になると、東京大学医学部整形外科教室の初代教授となった田代義徳は、1900年、ドイツへ留学し、整形外科<sup>7)</sup>を学び、1904年、体操的整形術(gymnastische Orthopädie)、包帯具師整形術(bandagisten Orthopädie)、外科学的整形術(chirurgische Orthopädie)、レントゲン学(Röntgen Lehre)、並びにリング(P.H.Ling)の医療体操(medical gymnasticあるいはremedial gymnasticとも言う)<sup>17)</sup>を器具を用いてできるようにしたザンダー(G.Zander)の装置を持ち帰ったのであった。

一方、教育界では、周知<sup>2,3,4,5,6,11,12,14)</sup>のように、1878年、わが国に適当した体育法の選定と体操教師養成の目的で「体操傳習所」を作ると、米国から招聘したリーランド(G.A.Leland)が、ルイス(D.Lewis)が改良を加えたリング(P.H.Ling)の医療体操を治療体操として紹介したのである。

ルイス(D.Lewis, 1823—1886)は、米国人であったが、『Kinesatrik』(1852年)や『Arztliche Zimmer Gymnastik』(1855年)等の著書のあるドイツのシュレーバー(D.G.M.Schreber, 1808—1861)の影響を受け、1861年、ボストンに、「Normal institute for physical education」を創り、1862年には、スエーデン体操の理論に従い、発育の十分でない者、虚弱な人達の体操を紹介した『New Gymnastics for men, women and children』を出版したのであった。

また、シュレーバーの『Arztliche Zimmer Gymnastik』の付図は、1872年、大学南校(現在の東京大学)で、『樹中体操法図』として翻訳出版され、1873年には、わが国における最初の文部省指定教科書ともなっていたのである。

その後、文部省直轄の体操傳習所は、1886年、廃止されてしまったが、これに変わるかのようにして、1893年、日本體育会の手になる「体操練習所」ができ、この練習所は、1900年、体操教員を養成する目的で、文部省管轄の各種学校として「体操学校」となったのである。

そして、1902年から、この学校で教鞭をとっていた、『瑞曲式教育的体操法』と『瑞曲式体操』(1902

年)の紹介者であり、医師でもある川瀬元九郎は、リング(P.H. Ling)の医療体操等を教示していたのであった。

このようにして、20世紀になって、医学や教育の世界に、医療体操が輸入されることにより、従来からの養生法としての導引按摩、具体的には、調息法や按摩・マッサージは通俗化し、ますます民間のものとなっていったのである。

そして、1903年、川瀬元九郎は、リング(P.H. Ling)の医療体操を療病的躰操と呼称し<sup>9)</sup>、1918年、田代義徳は、治療體操と言ひ<sup>5)</sup>、米国のフラウエンタール(H.W. Franenthal)の定義として、これを、「疾病の予防及び治癒のため、又畸形を矯正するために必要なるもの」<sup>5, p261)</sup>として紹介したのであった。

この頃、わが国には、原栄蔵の『自動的体操治療法』(1909年)や陸軍戸山学校で出版された(1914)、イギリスのワイデの著になる『医療体操』、そして、前田末善の『家庭及学校における医療体操の理論及実験』(1916年)がみられたのである。

また、体操学校の母体である日本体育会は、1907年、医療體操部を同会内部に設立し、1914年の大正博覧会には、医療体操並びにそのための器具器械を展示したのであった<sup>1)</sup>。

### 3. 柏倉松蔵の医療体操に対する考え方

『肢体不自由児の治療と家庭及学校』に見られる「私が心にかかってならなかったのは、どこの学校へ行っても、体操の時間になると、足や手の不自由な子供がきつと1人や2人はいて、運動場の隅にしょんぼりしていることでした。」<sup>4, p8)</sup>との柏倉松蔵の懐述にもあるように、柏倉松蔵の考えていた医療体操は、古来から、わが国に伝わる養生法としての導引按摩、具体的には調息法や按摩ではなく、いわゆる手足の不自由な子供たちのためのものであり、「あの不幸な子供たちをこのまま放ってはおけない。何とかしてやらなければ……」<sup>4, p8)</sup>ともあるように、その不自由を回復する手だてとしてのものであったと考えられるのである。

それ故、彼の創設した柏学園では、治病体操や保健体操、そしてマッサージがカリキュラムとして取り入れられ、実施されていたのである。(表2)

表2 柏学園におけるカリキュラム

修身
国語(読方, 綴方)
算術(珠算, 筆算)
地理, 歴史
理科
唱歌
手工(治病的手工, 職業的手工, 図画習字)
体操(治病体操, 保健体操)
マッサージ(治病)

ところで、川瀬元九郎の紹介した医療体操は、米国における理学療法発展に貢献したものであり、柏倉松蔵在職中の東京帝国大学整形外科教室のマッサージを業とする者達は、「術手」と呼称され<sup>9)</sup>、後に、わが国の理学療法士の誕生へと引き続いたものであったが、川瀬元九郎等から医療体操を学び、田代義徳の下で研鑽に努めた柏倉松蔵の医療体操に対する具体的な考え方は、どのようなものだったのであろうか。

柏学園を設立した1921年に出された『醫療體操ニ就イテ』と講演記録『醫療體操に就て』は、ほぼ同様の内容のものであるが、その中で、柏倉松蔵は、体操を学校體操、家庭體操、国民體操、そして醫療體操に分け、医療体操を次のように定義しているのである。

すなわち、その目的は、疾病の治療にあり、治病体操、療養体操、治療体操、医学的体操などと呼ばれることもあるとしているのである。

そして、これは、運動していれば自然に病気が治っていくというような類のものではなく、医学者が、多くの研究と実験をなし、その結果できたもので、医師の診断に対する治療法としての体操だとしているのである。

それ故、これは、「指一本、筋肉一つの運動迄も施すことがあり、尚其上にマッサージを行い又は虚勢、実勢、抵抗運動法等」<sup>3, p1)</sup>と分け施されるものであると紹介しているのである。

また、この医療体操は、全ての病に有効なものではなく、その多くは、整形外科に属する疾病治療に多く用いられ、側弯症、ポリオなどの末梢神経損傷、外傷性運動障害、中枢神経損傷、そして跛行などが対象となるが、当初、柏倉松蔵が主力をそそいできたものは、姿勢矯正、すなわち側弯

症の治療体操であると述べている。(表3)

表3 柏倉松蔵の用いた側弯症の治療体操  
脊椎側弯矯正体操

一 姿勢	直立
運動	一で、一手を上へ一手を横に力を入れて挙げる 二で、両手を下して旧に房す その人に依っては横に挙げて後に一手を上へ挙げるか、上を早くして横を後にするか、又同時の方がよいか何れでも効果の有る方を取る
二 姿勢	直立両手を四指を前にして両凸部に当る
運動	一、凸部に当てた両手で中心の脊柱に向って押付ける一方、頭を突挙げて全身を伸ばす 二、力を貰いて旧に復す
三 姿勢	片脚を前に出す、片手腰、片手頭取る
運動	一、前方に出した膝を軽く屈して彎曲を直す 二、屈げた膝を伸す その人に依っては姿勢を取った丈で幾分でも形が直される者も有るから人に依ってはこの反対の姿勢を取らせるのが当然です
四 姿勢	直立より片脚前、あるいは片脚横開、上体をその方に廻す
運動	両手を上に挙げて体は脚を中心にする如く屈する この時脚を両手の中心の位置に下げる 一、両手を上に挙げる、二、上体を半廻す 三、体を脚の上に屈する両手は肩の位置に習って下ろす 四、体の位置を換えぬ様に起す両手は体に従う 五、体を旧に復すと同時に両手を下ろすこの運動は熟練すれば四動にする 脚を半前に出すも横に開かせるのもその病体に従う
五 姿勢	両手両膝で匍匐状となる
運動	両膝と足尖の位を換えぬ様にして体と両手を交互に動かして屈する、この時背部を手に保つ事この運動は片方のみにするか両方にするかは、その病体に依るが右左両側にするのも善い運動法である
六 姿勢	直立より
運動	一、片手上、片手横に挙げる 二、上体を側方に屈する 三、そのまま体を起す 四、両手を下して旧に復す この時上に挙げた手掌は病体に依っては外側に向ける
七 姿勢	ベット伏臥
運動	一手上、一手体側下伸、上体を起す 二、力をぬいて休む
八 姿勢	前と同じ、一手を握り背部突出部に当て、一手を上へ伸ばす
運動	一、上体を起す 二、力をぬいて休む
九 姿勢	正坐 片手を膝頭の側につける
運動	一、一手を床を擦る如くして上に伸ばす一手は形を崩さぬ様にしっかりと膝側床に保持する、二、で伸した手を摺る様にして体側に戻す 胸廊の凹部の方の手を伸すのである
十 姿勢	脚を開いて肋木に向って胸廊の凸部の方の手を

下に、凹部の方の手で子を肩幅よりも広い位の所を高さを違はせて握り取る

運動 高く取った手の方に体を捻じって軀幹を伸ばす様に後方に引く、戻して休む

十一 円背の時と同じ

十二 円背の時と同じだが吊環の高さを違はせる軀幹の凹部の方の手には環を高くする

1918年、柏倉松蔵は、医療体操と教育体操を併用する考えで、岡山県師範学校を退職し、東京帝国大学整形外科教室へ入局したのであったが、彼のこの考え方を『医療体操ニ就イテ』の中にある「医療体操ハ学校教育ニ必要ナリヤ否ヤ」<sup>2, p59</sup>)を参考に探ると、多様な子供達ひとりひとりの発達を願う個別教育計画の必要性、身体的な弱点部分を補うための医療体操と、学校生徒の健康を保護増進し、全身の発育を均斉に発達させるという学校体操の目的達成のために、医療体操を学校体操へ加味する必要性を、以下のように述べているのである。

「小学校ノ教育ハ国民ノ義務教育場デアルカラ、就学免除ニナル不具廃疾児童以外ハ皆学校児童デアル、此広イ範囲ノ中ニハ、極ク強健ナ者ト極ク薄弱ナ身体ヲ有スル者モ含マレテ居ル、所ガ学校体操ハ此身体ノ強中弱ノ区別ニ向ッテハ余リ考慮サレテ居ナイ、又余リ考慮セズニヤルノガ学校体操ノ特徴デアルト云フテモ好イ、先ツ大體ニ各学年ゴトニ分ケテアル位ナ所デ好カラウト思フ、又何所ノ学校デモ事実ソウシテ体操ヲ課シテ居ル様ダ。一学年ノ強者ヲ標準ニシテ体操ヲ課スレバ中弱者ハソレニ堪エラレナイ、若シ弱者ヲ標準ニスレバ強中者ニハ利目ガナイト云フ按排デ仲々六ケ敷イ。学校体操モ肉體教育デアルカラ、理想トシテハ強中弱者ヨリ尚一步進ンデ各個人ニツイテヤラネバナラヌモノカモ知レヌガ、ソウナルト学校体操ト云フ名称ニ反シテ来ハセヌカト思フ。……(中略)……

小学校児童ニナルト先天的ニ身体ノ虚弱ノモノモアル、常ニ病氣勝チノモノモアル、中ニハ畸形児童モアル、斯々種々様々ナモノニ対シテハ、如何ニ学校体操ガ全身ヲ均斉ニ発達スルトカ、強健ニスルト云フテモ、同ジ思惠ニ預カルト云フコトハ至難ナコトデアル、又健康ナルモノデモ常ニ手ヤ足ヲ動カス上ニモ偏癖ガアル、特ニ不具者ナドハ總體的ニモ部分的ニモ発育ノ相違ガ著クシクナツテ来ル、此總體的ノ弱点部分的ノ欠点ヲ補足シテ行クニハ学校体操ハ頼リニナラナイ、然ラバ之等ノ点ヲ補養シテ行クニハ何ニ依ルカト云ヘバ医療体操ナリト云ハネバナラヌ。ノミナラズ、単ニ学校体操ヲ真ニ研究シ真ニ有カナラシメ、真ニ学校体操ノ実ヲ挙ゲントスルニハ、自然医療體

操ヲ研究スルノ必要起リ、醫療體操ヲ加味シタル  
学校體操ニ依ラネバナラヌ。……（以下略）  
……」<sup>2,p60,61</sup>)

そして、この医療体操の指導者については、「醫療體操ハ疾病或ハ之ニ類スル畸形的變形ノ生ジタ者ニ対シ、治療又ハ矯正スルヲ目的ニ出来テ居ルカラ、……（中略）……骨ニ異状ガアルノカ、又關節ニ異状ガアルノカ、或ハ筋肉ニ故障ガアルノカ、若シ筋ニ故障ガアルトスレバ、何所ノ筋ニ故障ガアルカ細シク調べネバナラヌ、尚ホ進ンデ外科手術ヲセネバナラヌカ、運動治療デ癒ルノカ、體操デ癒ルトスレバ何ナ方法ノ體操ヲ行ハセルガ可イカト、色々ナ方面カラ考ヘネバナラヌ、故ニ醫療體操ハ醫師ノヤルベキモノデアル、是レガ一番安全ナ方法デアル、所ガ此所ニ問題ノ起ルノハ、其労カト時間ノ關係、其他種々ナル關係データ醫者ガヤツテ居ルコトハ出来ナイ、ソコデ所謂助手即チ技術者ヲ要スルコトニナル、此技術者ハ醫者ノ命ニ從ツテ體操ヲ課スレバ好イノデアル。」<sup>2,p61,62</sup>)と述べ、医師に代って、その指示の下に、技術者が担当する必要性を説き、その技術者については、「学校醫ガ校内ノ衛生主任訓導トカ、體育主任訓導トカ、左モナクバー一人ノ訓導ニ醫療體操ヲ指導教授シ、之ヲ技術者トシテヤラセレバ実行モ出来ナイコトデハナイト思ウ。」<sup>2,p62</sup>)としているのであった。

この年(1921年)、柏倉松蔵は、柏学園を発足させると、その入園児童の多数が脳性麻痺児だったこともあり、彼が、ここで実施した医療体操は、<sup>4,16</sup>)立つ訓練と歩く訓練に主力を置いた整形外科的疾病治療を目的とする。種々の遊戯器具を用いたりしてする他動運動、自動運動を中心とした、いわゆる運動療法であり、現在で言う、神経生理学的諸法の域には達しないまでも、現今の理学療法とその内容は、非常に酷似したものであったのである。

#### 4. まとめ

柏倉松蔵の医療体操に対する考え方を、彼の著述、『醫療體操ニ就イテ』、『肢体不自由児の治療と家庭及学校』、並びに講演記録『醫療體操に就テ』を参考に探ったところ、以下のことが明らかになった。

- ① 柏倉松蔵が学び実施した医療体操は、古来からわが国に伝わる導引法ではなく、明治時代、わが国に、米国やドイツから移入されたリング(P.H. Ling)の体操にその元を発する医療体操であった。
- ② 柏倉松蔵は、医療体操を、主に、整形外科に属する疾病治療に用いるものであり、治療を目

的とした治療法としての体操であり、治療体操などと呼ぶこともあると述べていた。

- ③ 医療体操は、側弯症、末梢神経損傷、外傷性運動障害、中枢神経損傷、そして跛行などを対象としていたが、当初、柏倉松蔵が主力をそそいできたものは、姿勢矯正、すなわち、側弯症の治療体操であったが、柏学園発足と同時に、神経生理学的諸法の域には達しないまでも、その内容は、現今の理学療法と酷似した、種々の遊戯器具を用いたりしてする、いわゆる運動療法を中心とし、脳性麻痺児の治療訓練を主眼とするものであった。
- ④ 多様な子供達ひとりひとりの発達を願う立場から、柏倉松蔵は、個別教育計画の必要性を求め、医療体操を学校体操へ取り入れるべきであると実践していた。
- ⑤ 学校における医療体操は、医師の指示の下に、教師が担当することが望ましいと考えていた。  
(本研究の一部は、第21回日本特殊教育学会において発表した。)

#### 引用文献

- 1) 石原保秀：皇漢醫學及導引の史的考察，鳳鳴堂書店，1919
- 2) 柏倉松蔵：醫療體操ニ就イテ，日本学校衛生，第9巻，第3号，50—63，1921
- 3) 柏倉松蔵：醫療體操に就て，體育学理講演集，第4輯，1921
- 4) 柏倉松蔵：肢体不自由児の治療と学庭及学校，柏学園，1956
- 5) 田代義徳：鏡前體操，実験醫報，第4年，第40号，261，1907

#### 参考文献

- 1) 学校法人日本体育会：日本体育大学八十年史，日本体育会，1973
- 2) Hermann E. : Physical Education and Physical Therapy, JOHPER, Vol. 8, No. 3, 349—351 & 359, 1937
- 3) 今村嘉雄：西洋体育史・下，明星社，1949
- 4) 今村嘉雄：体育の歴史，大修館，1959
- 5) 今村嘉雄他訳：ライス世界体育史，不味堂，1965
- 6) 今村嘉雄：日本体育史，不味堂，1970
- 7) 金子魁一他：整形外科マッサージ療法，南江堂，1964
- 8) 川瀬元九郎：體操論，體育，第114号，6—15，1903
- 9) 小池文英：国内における機能療法及び職能療法，機能療法及び職能療法に関する研究，36—82，整肢療護園，1962

- 10) 中川一彦：柏倉松藏を育てた日本體育会體操学校，日本特殊教育学会・第18回大会発表論文集，254—255，1980
- 11) 中川一彦：障害児の教育における体育の役割，学校体育，第34巻，第12号，18—23，1980
- 12) 中川一彦：身体障害者とスポーツ，日本体育社，1981
- 13) 中川一彦：柏倉松藏と日本體育会體操学校の教育に関する研究，筑波大学体育科学系研究紀要，第6巻，21—27，1983
- 14) 二宮文右衛門：新学校體操，目黒書店，1940
- 15) 朱匯森：中華民国青少年民俗運動訪問団演出説明書，中華民国教育部，1981
- 16) 杉浦守邦：柏学園に関する研究，日本特殊教育学会発表論文集，第17回，344—345，1979，第18回，478—479，1980
- 17) Thulin J. G. : Gymnastic Hand-book, Sydsvenska Gymnastik-Institutet, Lund, 1947